

A Japanese translation of Wyndham Lewis's  
*Anglosaxony: A League that works* ( 2 )

MAEDA Shigeru

Following to my contribution to the last number of this bulletin, I continue to translate Wyndham Lewis's 1941 pamphlet titled 'Anglosaxony' into Japanese. In the previous part of this translation, we saw that Lewis considered political systems as expressions of peoples. On the other hand, he also wrote that they are "constantly changing" by reflecting *Zeitgeist*.

We can trace this Lewis's political thinking back to T. E. Hulme (1883-1917) who had close acquaintance with Votivist artists after he had been influenced by a German art historian, Wilhelm Worringer. Hulme had interpreted Worringer's *Stiltheorie* as a theory of our civilization and claimed an inevitable alternation from organic and vital *Weltanschauung* derived from our empathy for Nature to another one based on our impulse to extract stable, abstract and geometrical ideals from it. He saw in his contemporary abstract art, typically in Vorticist art, a symptom of this shift.

Lewis, partially inheriting this view and eliminating Communism and Fascism (the latter was originated in Italian Futurism by Lewis) as "an artificial intellectualist contraption," drew a picture of the world as a juxtaposition and interaction - not as an alternation of which Hulme conceived - of various political systems that are naturally expressed by peoples.

## ウイングダム・ルイス 『Anglosaxony : A League that Works』翻訳(2)

前田 茂  
MAEDA Shigeru

前号に引き続き、ウイングダム・ルイスが1941年に発表した小冊子『アングロサクソン気質』の翻訳を投稿させていただく。前号の訳文に先立つ紹介文では、1920年代後半以降のルイスの著作には政治体制を民族気質の反映だとする考え方が通底していると指摘し、これを「いわばモンテスキュー風の風土決定論」と形容しておいた。こうした考え方は、今回訳出した部分にも顕著に現れている。その一方で、例えばファシズム（もしくはそのさきがけとなった未来派）の根底にあったものとして「時代精神（Zeitgeist）」という言葉がルイスが用いていることから分かるように、政治体制は必ずしも単純な民族気質の反映のみにとどまるものではないともルイスは考えていたようである。それは民主主義に関しても同様であり、「民主主義というのは……限定的な、アングロ・サクソン人特有の事情である」とする一方で、ルイスは「民主主義は……あらゆる生き物と同様に絶えず変化するものでもある」とも述べているのである。

こうしたルイスの錯綜した考え方はT・E・ヒューム（Thomas Ernst Hulme, 1883-1917）からの影響に起因すると考えられよう。ルイスよりも一歳年下のヒュームは、1904年にケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジから放校処分を受けた後、しばらく英国国外を転々とし、そこで1908年に『抽象と感情移入』を世に問うたばかりのヴィルヘルム・ヴォリンガーに出会い、その学説から大きな影響を受ける。芸術表現には、人間に好意的な自然環境が生み出す形態への感情移入を主たる動機とする有機的な表現傾向と、人間の生存には適さない自然環境を超越して幾何学的な形態を抽象しようとする表現傾向との二極が見いだされるとするヴォリンガーの様式論は、ヒュームにおいては特に前者を批判するかたちで進展する。ヒュームが遺したノートにおいて<sup>1</sup>、感情移入にもとづく傾向は「ヒューマニズム」と名付けられる。「……ヒューマニズムのイデオロギーとは、人間と生命（life）を善と見なし、したがって実存との調和的な関係のうちにある。ゲーテをこうした時代の典型と考えてみよ。『人間本性は自らが世界とともにあることを知っており、結果として外的世界を何か自分に対してよそよそしいものとして感じるのではなく、これを自身の内的世界の感覚作用に呼応する片割れとして認

識するのである』。[改行] 汎神論、合理主義、観念論とは全て、このようなヒューマニズムの変化した形態であり、まさしく世界の完全な擬人化をなすとともに、当然のことながら活気ある形態から生じる歓びにもとづいた芸術をもたらす<sup>2</sup>。ヒュームはこうしたヒューマニズムがいずれ乗り越えられるべきものだと見た。

ヒュームのヒューマニズム批判は、1909年に彼がロンドンで立ち上げたサークルに、前回ヴォーティシストの一人として紹介したエズラ・パウンドを始めとする文筆家や画家が参加したことによって、当時の英国の前衛芸術運動と接点を持つことになった<sup>3</sup>。遅くとも1912年には、ヒュームはパウンドを介してルイスを、そして同じくヴォーティシズムに参加した彫刻家ジェイコブ・エプスタインを知ることとなる<sup>4</sup>。彼らの造形作品が示す抽象的な傾向は、この乗り越えの徴候だとしてヒュームによって正当化された。ヒュームが遺したノートの中で、彼が理想とする構成的で幾何学的な新しい芸術の具体例としてたびたびエプスタインやルイスの作品が挙げられているのは偶然ではない。第一次世界大戦が勃発するとヒュームは砲兵隊の一員として参戦し、1917年に前線で戦死した。存命中にまとまった著作を出版することはなかった彼が遺したノート類はハーバート・リードによって整理され、1924年にロンドンで出版される。1926年にそれまで表舞台から退いていたルイスが再び、ただし前衛芸術家ではなく政治思想家あるいは文明批評家に姿を変えて登場したとき、彼らに近い友人たちにとっては、まるで同じく第一次世界大戦に砲兵隊伍長として参戦していたルイスがヒュームの遺志を引き継いだかのように見えたことだろう。とりわけ芸術表現の様式論を、対立する世界観についての議論へと拡張したことによって、ヒュームは今回訳出したような芸術（未来派）と政治（ファシズム）を同列に語るルイスの独特な視点を用意することになった。

ヒュームからの影響を介在させることによって、表面的にはヴォーティシズムの造形と類似している（あるいはむしろその手本となった）ように見えるにもかかわらず、すでに1914年当時からルイスとヴォーティシストの芸術家たちが未来派を攻撃していた理由も理解できる。というのも、ヒュームが1914年に行なった講演「現代芸術とその哲学 (Modern Art and Its Philosophy)」のために用意された原稿では、「……未来派は、その論理的な形式においては、私が説明している芸術とは正反対のものであり、流動の神格化であって、印象派の最後の開花である」とされる<sup>5</sup>。眼前に広がる光景の移ろいを色斑の集合と見なし、これを画布に転写する印象派が究極のリアリズムだとすれば、その「最後の開花」である未来派もまた外的世界を「内的世界の感覚作用に呼応する片割れとして認識する」ヒューマニズムの芸術であって、これを乗り越えるのがまさしくヴォーティシズムだと考えられたのである。こうした未来派批判の残響は今回紹介するルイスの文章の中にも読み取ることができる。そこではアリストテレスの『詩学』におけるカタルシス論が参照されつつ未来派が批判される。カタルシスが実現する

のは、それを引き起こす光景があくまでも舞台上で役者が演じる表象にとどまるからであり、もし「文明化された芸術が……生活 (life) と区別のつかないものとなり、現実の〈恐れと憐れみ〉を生み出してしまえば、「顎にパンチを喰らわせるボクサーとマシンガンで弾丸を連射する兵士が……芸術家だということになる」。このルイスの指摘はややもすれば造形性よりも主題のセンセーションリズムに走りがちな今日の「現代アート」への辛辣な批判としても読むことができよう。

とはいえヒュームが提唱する二項対立は余りにも明確であるため、そこに内包される矛盾は明白である。一方では「自然のうちに見いだされる形態や運動を好み、これを歓ぶ感情」を擁する芸術を乗り越えられるべきものとして批判しつつ<sup>6</sup>、他方でその理由としてヒュームは次のように述べる。「芸術における特定の慣習ないし姿勢は有機的な生命との厳密な類比関係にある。それは年老いて、衰退する。それは一定の生存期間を持っており、死ぬ運命にある」<sup>7</sup>。生命とのアナロジーで世界を認識する態度が批判されるものの、その批判は芸術を生命になぞらえる観点から正当化される。ルイスはまず、共産主義やファシズムといった政治体制を——ただしここでファシズム=未来派はヒューマニズムの一形態だからではなく知識人が拵えた不自然的な政治体制であるがゆえに——過性のものとして排除した上で、さらに有機的か幾何学的かの二項対立と前者から後者への交替といった単純なヒュームの見通しを超えて、人々の生活様式や気質から自然に派生した様々な政治体制が並立し拮抗する世界を思い描くのである。そこでは様々な世界観=生活様式=政治体制が「生き物と同様に絶えず変化」し、おそらく世界が物理的に限られた空間となった現代においては互いに関係し合っているのだと言えよう。そこからルイスにとって次に問題となるのは、一度は「現代ドイツの成年男子の表現」として称賛したヒトラーならびに彼が率いるドイツ国家社会主義と、アングロ・サクソン人の気質の表現だとされる「民主主義」とをいかに論じるのかということである。しかし紙幅の都合により、この部分に関する訳文とその解説は次号に見送りたい。

## 註

- 1 ここで参照したのは、T. E. Hulme, Herbert Read (ed.), *Speculations: Essays on Humanism and the Philosophy of Art*, Routledge & Kegan Paul, 1960、さらに長谷川鑛平による翻訳、『ヒューマニズムと芸術の哲学』、法政大学出版局、1970年（新装版）である。以降、この著作からの引用には上記の1960年版のページ番号の後の丸括弧内に邦訳において相当するページ番号を記す。
- 2 Ibid., p.54 (52).
- 3 Jacob Isaacs, *The Background of Modern Poetry*, E. P. Dutton & Co., 1951, p.35.
- 4 F. Spalding, *British Art Since 1900*, Thames and Hudson, 1986, p.53.

- 5 Hulme, op.cit., p.94 (91). 同様の理解はヴォーティシストらの機関誌創刊号にも見いだせる——「我々は世界の外観を変えようとはしない。なぜなら我々は自然主義者でも印象派でも未来派（印象派の最終形態）でもなく、自らの芸術のために世界の外観に頼ったりはしないからだ」(Wyndham Lewis (ed.), *BLAST*, John Lane, 1914, p.9)。
- 6 Hulme, op.cit., p.85 (82).
- 7 Ibid., p.121 (116).

## 第七章 何であれ自由を掲げるものは民主主義に分類されるのか

先の章を読む中で、そのいくつかの部分について、一般読者に対してさらなる解説が求められるだろうことは私も理解している。私が懸念しているのは、一度ここで簡単に話の立脚点をおさらいしておかないと、一般読者が論点の一つないし二つを見過ごしてしまわないかということである。そこで本章では想定される誤解ないし理解不足を一掃することに専念しようと思う。

民主主義は輪郭がはっきりしないというだけではなく、あらゆる生き物と同様に絶えず変化するものでもある。定義しづらいというだけでなく時代ごとに変化するのである。次の二十年の内に民主主義はそれまで誰も知らなかったような形態をとるかもしれない。その一方で以前の段階へと揺り戻しを起すかもしれない。民主主義が今のままであるはずがない、ということは断言してもよからう。

このことは、ある事柄を言い表す言葉が存在するならその事柄は一定しているだろうと考えがちな読者にとってはチンプンカンプンかもしれない。こういう読者であれば、「民主主義」という言葉はほら、紙の上を書いてあるじゃないか、と言うだろう。それが変わったりはしない。だからそれが引き受けている、あるいは言い表わしている事柄だって変わるはずがない、と。しかしこれは大きな間違いだろう。事柄というものは我々がそれを名指すのに用いている言葉のことなどほとんどお構いなしなのである。

これが問題なのであって、言葉はひたすら不器用で不正確なラベルなのである。言葉だけではあまり表現の正確なラベルとはならない。(このこと具体例を挙げるなら)「男 (Man)」と「女 (Woman)」というラベルが引き受けている事柄は、一方では男性的な事柄全てと、他方では女性的な事柄全てと重なってはいない。言葉は極めて大雑把で泥縄式なのである。

このこと——言葉だけによる不安定さと不確かさ、そして言葉がどれほど緩やかにしかそれが言い表わしているものと近接していないか——を心に留めることによって、どんな民主主義であれ民主主義の全てではない、ということが理解されよう。どんな民主主義も政治的に似たり寄ったりということはないのだ。(しかしながらこの点については次章で取り上げたい。)

標識とラベルの不確かな性質について、そして言葉がどれほど我々をミスリードしうるのかについては、この点をうまく説明している次の言い回しのことを考えてみるとよい。すなわち、「ファシズムがアメリカに到来した暁には、それは民主主義と呼ばれるだろう」。

ギョッとさせる言い回しであり、とても気が重くなる。しかしこれを書いたのは民主主義者ではないし、私も民主主義者の一人としてそれが事実だとは思っていない。しかしながらそれは政治的にありえないことではなく、また我々がここで論じていることを解明するヒントにもなる。なんとすれば寡頭政治がかつて民主主義と呼ばれていたのである。世界のどこかで専制

政治が民主主義と呼ばれないとも限らないのだ（ただしありがたいことに合衆国ではそんなことは起きていないものの）。

しかしこれは物事それ自体というよりはラベルに関することである。つまりラベルが間違っただ対象に貼られているのである。とはいえ物事それ自体もまた——そしてここで私が検討している物事それ自体というのが民主主義なわけだが——誰がこれを実践するのかを国家が変えることによって変化してしまう。

この類いの変動について一つのアナロジーを紹介させてほしい。聖典——つまり旧約と新約からなる聖書——は、ヘブライとギリシアという二重の発想源を持っている。大雑把に言えば、旧約聖書は我々の宗旨のヘブライ的な側面を表わし、新約聖書はギリシア的な側面を表わしている。さて、いくつかの時代にはキリスト教会においてギリシア側の傾向が優勢だった。別の時代にはヘブライ側がもっと強力だったこともある（もちろんヘブライ側は我々の信仰の厳格に倫理的な部分をなしており、ギリシア側はもっと感情的で神秘的な部分をなしている）。

民主主義が有しているのは、このような聖なる書き物に謳われている単純な二重性、それを吟味すれば特定の時点でどちらが優勢な原理なのかを簡単に究明できるような二重性ではない。民主主義は数多くの異なる成分からできあがっている。しかし（先に強調しておいたように）キリスト教は民主主義にとって必須の背景であるがゆえに、キリスト教が揺れ動くとき民主主義もそれに合わせて揺れ動く。

正義と愛という二つの極端の間——徹底した正義であるような生活の概念と混じり気のない愛であるような生活の概念との間——には、民主主義という点で著しく異なる精神性の度合いが——キリスト教信仰にとってもそうであるように——併存している。

もちろんこう言ったからといって物事がいっそう明瞭になるわけでもあるまい。言うまでもなく、私が示そうとしているのは我々が「民主主義」というラベルを貼り付けている感情の集合体——というのもそれこそが民主主義にほかならないからだ——がどれほど多様でありうるか、ということである。広く認められているように、ある時代にはこうした感情の集合体は決して本当の民主主義ではないとすら言えるほど民主主義未満のものでもあった。それはまた、その情熱的で神秘的な慈善行為と仲間意識においては原始キリスト教とも区別できないほど熱烈な仕方でも民主主義的にもなりえた。とはいえ今は先の章の文章へと立ち戻ろうと思う。そのなかの複数の論点についてはさらに議論を重ねる必要があると思われる。

\* \* \* \* \*

最初の困難は言葉の問題であるように私には思われる。「絶対主義的 (absolutist)」といっ



た長い単語、あるいは見慣れぬ単語は、常に厄介であり、できるだけ使わずに済ませたいものだ。しかし主題のそうした側面が徹底的に検討されることになる場合には、それら長い単語の一つを用いる必要があった。

このたびの戦争のあとに生まれ出る世界では——というのも大きな社会変革が否応なしに起きるだろうということは広く賛同を得ているからだが——、私の個人的な見解としては「よく考えられた上での複数タイプの政治信条」というのが最もありそうなことだと思える。私が言いたいのは、当たり前ではあるが、民主主義と同様にどんな事柄であれ普遍的に受け入れられることはない、ということである。それは多くを望み過ぎであろう。それは望ましいことでないかもしれない。そういうわけで私は「よく考えられた上での」という言葉を用いた。またそういう次第で私は民主主義の非絶対主義的な性格を強調したのである。

民主主義というのは——ずっと強調しているように——限定的な、アングロ・サクソン人特有の事情である。私はそれが特定の民族のおよび地理的な範囲内に留め置かれるよう望まれてしかるべきだと感じている。

私が民主主義に国家主義的な性格を与えているように見えるといったことは決してあってはならない。我々はリアリストでなければならない。このたびの戦争によって動き始めた諸力は、たとえどんなに我々がそうなるべきだと願ったとしても、すぐには弱まったりお役御免になったりはしない。したがってそれらの力を押さえ込もうとはしない方がおそらく賢明だろう。そうではなく自然（あるいは人間本性）がその道筋をたどるがままにすることが肝要である。

よく考えられた上でならば我々は過度に単純で絶対主義的なパターンよりもむしろ複雑なパターンを思い描けるほどには賢明であってもよかろう。そしてその際に民主主義は、自らの信条を誰かれかまわず押しつけようとする政治体制として馬脚をあらわすというよりはむしろ、いくつかある生活様式の一つであるだろう。

我々の周囲には十分な数の理論家があり、彼らは何か出来合いのもの——その知識人のご立派な一般化の所産——を、御し難い有機的身体に押しつけている。ここでは一つ趣向を変えて自然がたどる道筋——自然がそう見えている通りに曲がりくねった複雑な道筋——を試してみよう。私が言わんとしているのはそれだけのことなのだ。そうすれば、いかなる絶対主義も、つまり言ってみれば知識人によるいかなる帝国主義も、なくなることだろう。そしてそれはまた、言うまでもなく、十人十色流の真に民主主義的な進め方であるだろう。

我々は民主主義者である——それはまことに結構なことである。他の連中は、彼らの本能の命じるままに何になるにせよ、放っておこう。ただし我々に挑みかかったり無理強いしたりするのでない限りは。そしてもちろん彼らが毎晩自分らの家で人殺しをし、近所に住む我々が彼らの犠牲者の悲鳴を聞かされてベッドで寝つけないままにさせるのが彼らの権利だと主張しな



い限りは。

いずれにせよ、ここらあたりで「絶対主義的」という言葉の意味は十分に明瞭であるべきだ。「絶対的」な君主——「立憲的」な君主に対立するような——は、ご存知のとおり立法者であつて絶対的で無制限の権力をほしいままにしている。カトリック教会は「絶対主義的」な教会である。なぜならそれはキリスト教の信者集団の中で筆頭かつ最も偉大であると主張し、かつ実際にそうであるし、例えば英国国教会とは違うやり方で普遍的な統治を目標としているからだ。後者の英国国教会については、その名称からして自らの野心が限定的であることを示している。民主主義とは政治における英国国教会らしさなのである。

\* \* \* \* \*

先章の文章から再度取り上げておきたい事柄のもう一つは「ロシアから流れ出た大きなピンク色〔穏健の共産主義〕の潮流」に関する箇所である。そしてイギリスとアメリカの教養ある階級が、ジャーナリストと知識人に誘導されて、どのようにこの潮流に身を投じたのか、あるいは結局のところその中で水遊びをして回ったのか（もちろんそれはつまり、いかにしてこの潮流は暴力的な血の赤というよりはむしろピンク色になるのか）ということである。さらには、いかにして民主主義は一時的にはあれ自らをこの潮流と混ぜ合わせえたのか、ということである。あるいはまた、社会の再建への健全な衝動がいかにして民主主義へと流れ込み、これを神秘的な極へと方向転換させ、その結果、我々全員がお互いを「市民 (citoyen)」と、あるいはもっと適切にはアメリカ流に「兄弟」および「姉妹」と、呼び始めるようなことが起こりえたのか、ということである。

このピンク色の潮流は力尽きてしまった。ポーランド、フィンランド、その他で近頃スターリンがやらかして以降、ロシア共産主義を心底真面目に受け取る者はいなくなった。しかしこの潮流のいわば最終段階（それによって刺激されたキリスト教的な衝動）は、民主主義を助けて社会問題にうまく対処させられるかも知れないし、あるいはその代わりに民主主義がこの最終段階をうまく操縦して、過度に特権化された自身の瘤をうまく痛みなしに切除できるくらいにはピンク色になり、そして社会構造の知性的で秩序立った大刷新を経験する結果、最高の頭脳集団が、今は中産階級のビジネスマンが低俗で刹那的な豊かさを謳歌する中で生じているように凡庸さによって硬直・麻痺する代わりに、自由に機能する機会を得るかもしれない<sup>原註1</sup>。以上のことは全て古き良き民主主義の枠組みの中で、その原則を過度に拡張せずともできたことである。というのも民主主義は自由でありさえすれば何にでもなりうるのだから。このことを我々の民主主義の黄金律にしよう。何であれ「自由」をモットーに掲げるものは民主主義に

分類されうるのだ。

## 第八章 ファシストの種類

先ほど私は言葉というものが、最もありふれた言葉でさえ、概して複合的な事柄を担っていて、それは徹頭徹尾一つの質、すなわちその言葉が指し示している質、だけでできあがったものではないと述べた。それは「民主主義」や「ファシズム」といった言葉にも当てはまる。これらの言葉は理念である。後者は残酷で醜悪な理念であり、前者は温和で魅力的な理念だ。しかし完璧に仕上がった「乱暴者」(ファシストの種類)というのは「優れて完璧なジェントルマン」(民主主義者の種類)と同じくらい稀有である。

あらゆる国家に民主主義者とファシストがいる。民主制にのみ民主主義者がいるわけではなく、ファシスト国家にのみファシストがいるわけではない。いたるところに数多くの民主主義者とファシストが満ちているのだ。せいぜいイングランドのようなくつかの国では民主主義者が多数派になりがちであり、他のドイツのような国ではファシストがそうなりがちだと言えるに過ぎない。アメリカ合衆国とは言えば、確かにアメリカの民主主義は全く嘘偽りなく、見事ですらあるものの、実際にはかなりファシズムの傾向が強い。偉大な民主主義者である[第三二代大統領フランクリン・] ルーズヴェルト氏はいささか苦勞してそれを押さえ込んでいる。

ファシストという言葉は黨員というよりはむしろ人間の類型を意味するようになった。それゆえ私がアメリカにかなりのファシストがいるという場合、私が言いたいのはファシスト型の個人がかなり多くいるということである。例えばアイルランド系の警察官の多くは[ハインリヒ・] ヒムラーかヒトラーの面目も保てそうである。さらにアメリカの多様なビジネスマンのなかには冷酷な辣腕家タイプもいて、その精神的な故郷がプロイセンの首都[ベルリン]であることは疑うべくもない。

ゆえにファシストであるためにドイツ系アメリカ人協会<sup>1</sup>の会員や銀シャツ党<sup>2</sup>の組織員である必要はない。それはほとんど必須条件ではないのだ。彼はどこの団体にも属さない普通の一市民でありうるし、そうした類いの団体とはまったく無縁でありうる。胸を突き出し、紡錘型の頭を持ち、その中にはチクタク動くストップウォッチがあつて、恭順の才能を多分に持ち合わせ、そして的を外さないというだけにしては余りに大きな拳で目に映るもの全てを殴りつけるのに必要となる以上の想像力は持ち合わせていない只の人——。どの党公認候補に投票するかにかかわらず彼らはファシストなのである。

「ファシスト」に劣らず「民主主義者」もまた一つの政治哲学の信奉者を意味している。全てのアングロ・サクソン人が民主主義者ではないのは全てのイタリア人がファシストでないのと同じである。高位のファシスト党支持者の、さらにムッソリーニに近い身内ですら、どの程

度までファシスト的であるかについては間違いなく大きな程度の差がある。

この時代が吐き出してきた特定タイプの人間——、それこそ「ファシスト」が意味するようになったものである。そしてこの時代は、たとえ [ヒトラー] 総統と [ムッソリーニ] 総帥が表舞台に現れることがなかったとしても、このタイプの人間を吐き出したことだろう。ファシストは国家主義者である必要すらない（確かに国家主義は他の誰その頭を叩き割ることにとっては好都合な言い訳であるがゆえに大多数のファシストが国家主義者なのだが）。そういうわけで一部の共産主義者はファシストであり、しかもスターリンが最初の協定をベルリンと結ぶよりずっと以前からファシストだったのである。

他方で、たとえどんなに努力してもファシストにはなりえない人々もいる。彼らの頭は歪な形をしている。彼らの目は余りに寛容な輝きを帯びている。彼らの口元は余りに心安く、余りにとっつきやすい微笑みをたたえている。つまり彼らは常に余りにも謙虚な威厳を保っているのだ。彼らは十分に下品になるすべを知らなかったのだろう！ というのも何にもましてファシストを特徴づけているものがあるとすれば、それは下品さであるからだ。

我々はすでに「紳士 (gentleman)」という言葉——あるいはフランス語でなら「gentilhomme」——を階級から独立させ、新しく、そしていっそう広い意味を生み出した。「民主主義」がそうだったのと同じくらいに、この言葉もまた定義するのが難しいと認めるべきである。そして「下品 (vulgar)」という言葉も、下品な人物の心の内は別として、もはや階級に関わる意味合いを失っている。とはいえ「ファシスト」は紳士の対義語である——この否定的な定義のおかげで「ファシスト」の意味するものに肉薄できる。というのも、寛大かつ謙虚であって控えめな表現を使いがちであること、自分よりも不運な人々との関係に細心の注意を払うこと、大騒ぎせず物静かなこと——、ファシストが蔑む特性はこれで全て集約されたことになる。これらの特性の一つでも顕著なくらいに備えていたならば、あなたはファシスト失格ということになるだろう。

\* \* \* \* \*

先ほど述べたように「ファシスト」という言葉は今では現代に特有な人間の類型として人口に膾炙するようになってしまい、もはやドイツの国家社会主義党の党员やイタリアのファシスト党の党员を意味するものでなくなってしまった。このことはもちろん今ここで問題にしている政治哲学の理解を、もしそうしたければだが、容易にしてくれる。というのも我々は友人たちの中で最も「ファシスト」的な者を観察しさえすればよいのだから。そして我々はその友人が通りを気取って闊歩したり、路面電車で割り込み乗車したり、最高の奇襲戦法のような仕方

で犬を轢き殺したり（ファシストはみな犬嫌いで、犬好きをあざ笑うものだ）、何人もの貧しい下宿屋の女将に偽小切手を渡したり、玄関先のクリスマスツリーに顔をしかめたり、相手が弱い立場にいて自分は強い立場にいるという理由で給仕を虐めたり、ホテルの鏡に自分の胸板を映してうっとりしてみたり、タクシーの運転手に10セントもくれてやる法律などないのだからと5セントしかチップを渡さなかったり、ジャングルの掟によればそんな連中は死んでも仕方がないのだと言って老人や年長者に対して不躰に振舞ったりするのを観察する。つまり我々は友人らが上記のように振る舞うのを注視しさえすればよいのであって、ニーチェ、ヒューストン・ステュアート・チェンバレン<sup>3</sup>、[ジョルジュ・] ソレルや [アルテュール・ド・] ゴピノーを読むまでもないのだ。

個人の性格——誰その政治上のレッテルが何であるかに関わらず——にこそ我々は最も注意を払うべきであり、そうすることで自分なりの「ファシズム」と「民主主義」の定義にたどり着くことができる。これらの事柄は我々にとって生身の人間性の内に規定されている。

とはいえ我々は見つけ出すべきものをいつも知っているわけではない。そしてかなりの頻度でこれら「ファシスト」と「民主主義者」という用語が間違っって使われるのを見てきた。しばしば私は温和で少しばかり反動的な人が「ファシスト」と呼ばれるのを、そして何人かの冷静で活動家ではないりべラルな人々が「アカ」と呼ばれるのを耳にしてきた。ヴィルヘルム通り<sup>4</sup>にこそ似つかわしい権威主義的な気質を持つ大勢の人々のことを理屈の上では「民主主義者」と名付けることも可能だった。ヒトラーの親衛隊の何人かの中には、そんなものよりずっと本物のエリートにこそ相応しい者がいるはずである。多くのイタリア人はムッソリーニ一流の英雄気取りを苦々しく思っているに違いなく、どんな頭のおかしい政治学者先生の権威を借りたなら、多くの勤勉なイタリア人農夫が多くのギリシア人農夫のもとへと赴き奉仕するよう強制されねばならない<sup>5</sup>のかと自問しているに違いない。

\* \* \* \* \*

用心深い民主主義の中であって我々の身を偽物から守れるよう準備しておくべきである。そのためには何が民主主義的な考え方と感じ方にとっての必須条件なのかを肝に銘じておくべきだ。

ここで「民主主義的」であるとは何を意味しているのかを人物基準で明確にしてみるというのはどうだろうか。本物の民主主義者にとって不可欠な構成要素をいくつか一覧にしてみたらどうなるだろうか。

(1) 心根が平和的でない者（いわゆる「反戦主義者」に追随する必要はないもの）は民

主義者ではありえない。喧嘩っ早い者、喧嘩を煽る者はファシズム的な現象であって民主主義的な類型ではない。(2) 社交的な俗物は民主主義者としての資格を持たない。ある男に偽ロシア大公女<sup>6</sup>への偏愛が認められたなら、その男はファシストの精神性を構成する要素を一つ持っていることが分かる。(3) 動物虐待はファシストの特徴である。「正直な田舎っぺ」や害のない田舎者で通っているような無教養な無骨者(ただし自分の飼っている馬に対してはいささか乱暴な者)の多くは親衛隊員の素質を持っている。(4) 民主主義者にとって何より最大の必須条件は下品さの欠如である。というのもファシズムほど下品なものはないからである。まさに現代ドイツのような成り上がり国家こそ最良のファシストを作り出す(ちなみに現代のイタリア人は古代ローマ人とは何の関係もなく、彼は「古代ローマの将軍」カトーの子孫ではなく、広大なラティフンディウム<sup>7</sup>が世界中に散らばっていた名残りであり、カトー所有の農場で働いていたアルメニア人あるいはスキタイ人の奴隷の子孫である)。

\* \* \* \* \*

人々が誰かを侮辱しようと思うとき、彼らはその人を「アカ」であるとか「ファシスト」であるとか呼ぶ(どちらの呼び名を使うかは状況次第である)。スターリンと私自身の間にくらかの他人行儀が存在するようになって久しいがゆえに私は「ファシスト」の称号を免れえなかった。とはいえ——私がかつて理解していた限りでは——ファシズムが共産主義以上に私の関心を引くことはなかった。少なくとも共産主義は——初めの頃は——無力な人々の救済と関わりがあり、そして世界をいっそう寛大で思慮深い場所に変えようとしている振りをしていた。なるほどそれは人間存在とその苦難を出発点としているのだ。ファシズムが殺戮を賛美し、人は狼を手本とすべきだと説く一方で、共産主義は芸術家を信仰復興論者風の政治のためのイエスマンの身分へと格下げしようとし、分析的な精神と余りに雄弁な舌を持っている責任を負うべきだとして哲学者をまとめて抑圧しようとする(そして政治家だけが独占的に饒舌である)。そしてその「指導者綱領」は、上っ面だけは政治的な専門用語で飾り立てられているものの、指導者らが財務上の大海賊どもの時代を知性の面を上回れるほど高級な部類ではないことを前提にしている。

## 第二部 ファシズムはいかにして始まるのか

### 第一章 領土においてではなく書籍の中に探求されるべきファシズムの根源

いよいよファシズムの、あるいは国家社会主義の根源を掘り出す作業を始めねばならない。

私は、テュートン族の血筋であるとかドイツ祖国の土壌といったものを論じるつもりはない。「血と領土 (Blut und Boden)」は確かにナチスの標語である。しかし「血」と「領土」はそれらの物理的なリアリティーをはるかに超えた単語である。

アングロ・サクソン流の民主主義の根源 (roots) は他のどこよりもまず大洋の波間に探し求められるべきである (この点については後ほど明らかにする)。そしてそれは比喩の混ぜ合わせではない。なぜならある意味でアングロ・サクソンの民主主義は根を持たない (rootless) のだから。大西洋や北海の海流から根っこを掘り出すというのは不可能である。ところがイングランド人の根っこを見出すのに最も適しているのはいかなる「領土」でもなくむしろそこなのである。

アングロ・サクソン流の民主主義が自然現象だとすれば、反対にファシズムは繰り返して言えば知識人の拵えた人工的な珍発明である。ファシストは共産主義者と同様に理論家なのである。その有名な領土ドクトリンは文学であって、農夫の心情から自然に花開いたものではない。それゆえ、ここでの探求において私はファシストの根源を文学の中を探してみよう。書物のページの中からそれを掘り出してみよう。それは初期のファシズム的な哲学者の教理の中に探されることになる。そしてこれらの哲学者たちの一人を生前のおりに復元して読者の眼前に連れてこようと思う。

\* \* \* \* \*

最初のファシストは誰か？ もし誰かが最初のファシストを実人物として紹介してくれる映画を制作したなら、我々はファシズムについてもっと多くのことを理解するに違いない。そこでは彼がこの致命的な哲学を次第に進化させていき、彼自身の意識の内奥から少しずつこの哲学が生み出され、それを他の人々へと伝え広めていくのである。それはちょうど——『スミス都へ行く』<sup>8</sup>の系列に属するような——娯楽にもなると同時に教育的な歴史映画となるだろう。ベン・ヘクト氏かあるいは誰か別の映画プロデューサーがこの企画を心の中で温め始めていてもおかしくはない。それはいい金儲けにもなるだろう。

すぐに言い添えておいた方がよいと思うのはムッソリーニが最初のファシストだと考えるのは間違いだ、ということである。彼はいずれ最後のファシストだったということになるかも知れない。しかし彼は最初ではない。

実のところ私は実在する最初のファシストに会ったことがある。もし上記の映画が本当に世に出るようなことがあるなら、私の相談役としての資格は計り知れないほどであるに違いない。私はこの最初のファシストと一戦を交えた、あるいは少なくとも『ロンドン・プレス』紙上で



彼相手の論争に携わったことがあるのだ。私は彼によって非難され、彼は私によって正体を暴かれた。

それはまったくの傑作だった。というのも当時、ファシズムはそのようには呼ばれていなかったからである。それは今とは違う名前、すなわち未来派と呼ばれていたのである。

ファシズムの革命には、どこかしらフランス革命におけるマラーとロベスピエールのさきがけとなった「思想家」たちと同じ類いの先駆者がいた。この黎明期のファシスト——あるいは自称「未来派」——の言葉による爆撃が、ムツリーニによるもっと現実的なパフォーマンスのための道を拓いたのである。ただし現下の戦争を見るにつけ、ムツリーニもまた命懸けもしくは具体的な何かを備えていたというよりはむしろ口先だけの男として歴史に名を残すだろうという印象は拭えないが。

\* \* \* \* \*

一見すると、このような政治的な小冊子において「未来派」のことを語るのはかなり奇妙に思えるかも知れない。というのもアメリカ人の心情にとって（そして私の読者の多くはアメリカ人であろう）、ジャーナリスト、パンフレット制作者、詭弁家、「思想家」というのは政治思想の王国において革命を開始する者ではないからだ。そんなことは彼らにしてみれば身に余る荣誉だろう。

これら哀れな月給取りの物書きは、支配体制に阿るか抗うかは違えど仕事として——たいてい匿名で——物を書く。彼らは何も始めたりはしない。実際、彼らは裕福でないため、彼らが何かを始めるはずだと考えるのは論外であり、余りに不適切である。彼らが表現しているのは、程度の差こそあれ無教養な雇用主の何人かが考えていることである。彼らは自分自身の考えなど持っていない。

物書きがアメリカにおいて占めている地位の重要性はヨーロッパにおいてよりもはるかに低い——北米大陸にはバーナード・ショーのような人物は存在しないし、これまでも存在しうがなかった。結果としてアメリカ人たちにとっては世界を大混乱させている大規模な騒動が（「未来派」と呼ばれる）美学理論として出発し、単なる芸術運動——狂暴な流行——としてヨーロッパの講義室とアトリエで始まったということが、しかもその頃、ドイツ皇帝はなおも帝政ドイツにとっての「当然の分け前」を喧伝するためにドレッドノート級戦艦を建造し続け、またイタリア人たちはホテル経営者や博物館職員といった人々、すなわちずっと昔に彼らが引き受けるよう説かれていた勇猛果敢な役よりもはるかに身の丈に合った役割を引き受けることに引き続き甘んじていた、ということが全く信じられなくなってしまう。



しかしながら話を先に進めて最初のファシストが私の前に現れたときの様子を素描させてほしい。そのとき彼は小さな生ける湯沸かし器のような人間であり、時計仕掛けの人形のように飛び上がったり弾け飛んだりして、屈託のない戦前のロンドンの聴衆を驚かせ楽しませたのである。

## 第二章 ファシズムの父

1913年、マリネッティという名のイタリア人がロンドンに現れた。彼は自分が「未来派」と呼ぶ生活哲学を携えていた。今やマリネッティは「ファシズムの父」である。その称号のもとで彼を祝う祭礼が数年前にローマで開催されたのである。それはムッソリーニの資金による公式の祝宴だった。それゆえもう微塵も疑いようがない——この男が全てのことを開始したのであり、また開始したと認められているのである。

もし苦勞して入手することができたなら、マリネッティのいくつかの著作の中に、力についての純粹にファシズム的な教理が見つかるだろう。それは当初、次々と発行されるパンフレットの中に突如として姿を表し、次いで演台の上でイングランドとヨーロッパのカフェの聴衆たちに向けて矢継ぎ早に行なわれた演説へと迸り出た。ファシズムとその意味、その方法論について教えてくれる手引きはこの大なる言葉の腹下しより他にない。それはファシズムが最初にひらめき出した瞬間なのである。今日のムッソリーニが彼の手下どもに銃剣の並んだ防衛線を跳び越えろだとか、他の似たような方法で彼らの身体的な適性を披露しろだとか命令を下す時でさえ、それはこの未来派の総統閣下の足跡をただ辿っているだけなのだ。

マリネッティはムッソリーニとほぼ同い年である。そこで読者は次のように質問するかも知れない。ではどうしてマリネッティ自身がイタリアにおけるファシズム革命を開始しなかったのか、と。

彼は政治家ではなかった、というのがその答えである。ムッソリーニは政治屋であり、この文学的な騒動を実践的な政治活動へと置き直し、ファシスト武装集団を組織して、ついにはその先頭に立ってローマを行進したのだ。

マリネッティは極端に活動的な人物だったが、ムッソリーニがしたようなことを実行するには余りに文化的な事柄に心を奪われていた。彼が扇動活動をしたのはサロンやカフェ、小綺麗な講義室だった。手に武器を持ちながら通りで扇動活動をすることなど彼には無理であった。彼は政治的なギャングというよりは、むしろ喧嘩好きな吟遊詩人だったのである。

当時のマリネッティは裕福だったのでムッソリーニのようにマルクス主義の勉強はしていなかった。彼は通りで乱闘騒ぎと密輸したマシンガンといった道具立てではものを考えていなかった。実のところ彼が自身の物騒な考えを広めるのに利用したのは図画と油彩画だったので

ある。

彼は美術館と斜塔とフレスコ画がある教会の地というイタリアの地位を罵倒していた——そして上記の全てがダイナマイトで爆破されるべきだと主張していた——にもかかわらず、彼は油彩画や彫像といったものを重視する程度には十分にイタリア人の素質を持っていた。彼は言葉の力を高く評価する程度には十分にラテン民族の一員だったのだ。毎週、彼は数百万もの言葉を発射していた。そしてそれらの言葉もまた荒々しく急回転していた。

フランス人は肩をすくめ、イギリス人は快活に笑い飛ばし、ドイツ人はビールを飲み、そしてドレッドノート級戦艦を建造し続けた。しかしこの騒々しい小男は現代のカエサルたちの先陣を切るための道を開拓しつつあった。

\* \* \* \* \*

この最も深刻でさえある政治上の事象がどんな具合にヨーロッパで産声を上げたのかを理解してもらうとすれば、それはまるでインテリ向きの道化師たちと芸術的な奇人たちによる身の毛もよだつ見世物でいっばいのバーナム&ベイリー・サーカス<sup>9</sup>が突如、普段の興行の結果として国家規模の大変動を引き起こしたようなものと言えよいだらうか。つまり戦慄とともに始まったものが最終的にワートルローの戦いに帰着するのである。あるいは同じくらい馬鹿げた喩えを選んでみるなら、それはまるでニューヨーク近代美術館にいる[アルフレッド・]バー[・ジュニア]氏が今よりも格段に口達者で精力的であるようなものである。そしてあたかも彼が《力とダイナミックな人間》といった考えに取り憑かれ、突然自分がアメリカ合衆国で暴動を起こした労働党の守護聖人であると気付くようなものである。とはいえアメリカが置かれた状況において、こうした類いの現象を理解するのに助けとなるものを探すのはほぼ不可能である。

マリネッティ師はサーカス団を所有しており、それは不協和音の非常に耳障りなサーカスだった。彼の未来派のサーカスはヨーロッパ大陸を巡業して回った。それは奇人変人ばかりで成り立っていた——すなわちマリネッティ師の有名な未来派の奇人変人たちで、そこでは絵を描く者、詩を作文する者、音楽を作曲する者、建築が専門だと称する者たちが彼らの哲学を実演し、それが彼らのアクション演技——奇天烈な類いのものであれば何であれアクション(ライブニッツやカントが使ったような時代遅れの古い言葉[行為]としてではなく)——なのだった。

\* \* \* \* \*

それは新たなイタリア・ルネサンスだった。ただ違うのは驚くほど近代的でアメリカ的だったことである。それが最も崇敬したものの一つは超高層ビルだった。レーシング・カーはもう一つの崇敬対象だった。航空機にいたってはほとんど神であった。マリネッティは何千ものページを、鳥人間とその力強い翼を賞賛する痙攣したかのような修辞で埋め尽くした。

イタリア人たちを過去から解放すること——それが第一段階だった。ラファエロ、ティツィアーノ、レオナルドらの全ての絵画作品で篝火を焚いてしまえ——ピサの斜塔、コロッセオ、サン・マルコ寺院などが灰燼に帰してしまうまで。そうすればイタリアは抜きん出た国家になることができよう。

ヨーロッパにパンフレットが溢れかえった。というのも先に指摘したようにマリネッティは裕福だったからだが、噂によれば彼の父親はアレクサンドリアの全ての売春宿をトラスト化した人物だと言われている。

あるマニフェストには「女性の贅沢に抗して」というタイトルが付けられていたことが思い出される。

これはシルク・ストッキングと口紅に対する過激な告発文だった。ヒトラーですらマリネッティ師ほどには口紅を毛嫌いすることはできなかったろう。女性たちはしかるべき場所に幽閉され、自らを美しく着飾らないよう、ゆえに未来派のための良き資金を浪費しないよう命じられた。この資金は航空機と快速艇——要するに素早く動くものなら何でも——のために必要だったのである。

スピードの概念が他の何よりも優先された。当然のことながら成層圏は、地表からすぐ上にへばりついている大気圏のいっそう薄汚れた数マイルよりもはるかに良いものだった。しかしこの成層圏とは何かそれ以上に素晴らしいものへと進むための足がかりに過ぎなかった。

\* \* \* \* \*

演台の上のマリネッティ師は半狂乱のビククリ箱だった。あちこちへと飛び出しては言葉の急流をとめどなく口から吐き出した。それらは大型の打楽器のような言葉であり、榴弾砲が炸裂したかのような衝撃とともに鼓膜を強打した。それら全てが足し合わさって一つのもの——すなわち力、スピード、権力となっていた。

この胚胎状のファシストはレヴァント船に乗った交易者のような人格を持っていたが、その善良さは見せかけだった。彼はかつてバルカン半島における戦争特派員であり、その戦争に関する「詩」は近代戦の騒音で満たされていた。ドタバタと音を立て、飛び跳ね、ゼイゼイ息を

吐き、口笛を吹き——ただし注がれる言葉は甘く——彼は演台から聴衆に向けて響め面をしたり叫んだり、まさに聴衆を集中砲火のただ中にいるような気にさせていた。

その部分だけ見ると、それはまるで周囲の気を引きたがる男児を見ているようなものだ。しかし彼の未来派には深刻な側面も存在していた。この騒音と激情が相まったことで一つの反応を呼び起こしたのだ。この小男はその時代の雰囲気なをなしていたものを代表していた。手短な検分の後で私はこの狂乱のダイナミズムを備えた福音の中にやがて政治的にはファシズムへと変貌することになる有害な原理が潜んでいることを嗅ぎつけ、すぐさまこの発見に対処した。私は彼を告発し、彼が罹患している病が何なのかを説明したのである。

私は同じように感じていた一群の人々（その中には——アメリカでは「凶暴な救世主 (Savage Messiah)」としていっそうよく知られた——ゴードイエ・ブルゼスカもいた）を集めて、ともにロンドンの講演会場へと行進し、そこで小綺麗な聴衆たちに向けて演説していた彼に対して騒々しい反論を突きつけたのだった<sup>10</sup>。この時には「凶暴な救世主」はとりわけ凶暴で、ほとんどマリネッティ以上に大きな騒音を立てて大いに彼を苛立たせた。

\* \* \* \* \*

要するに以上が未来派だった。後の政治的な形態において、この運動にはその創始者が要求しただけの十分なダイナミズムと活気が加えられた。とはいえ細部においては強調点が異なっていた。すなわち政治的な要請ゆえに、例えばコロッセオ等は無傷のままにしておくことが求められた。ムッソリーニは過去を破壊するどころかハリウッド風の過去の再構成を行なったのである。彼はマリネッティ風の航空機狂いと高速艇狂いは引き継いだものの、これら近代的な動力原理を古代ローマの権力という装飾具と結びつけた。彼は極めて新しいものと極めて古いものの乱暴な婚姻を成就させたのだ。

「passéiste」——つまり懐古主義者、骨董好きというのはマリネッティが好んだ罵り言葉だった。ある点までは、ジョルジョ・デ・キリコの剣闘士が骨董趣味的であるような仕方で、ムッソリーニは骨董好きである。そしてマリネッティの融通の利かない近代性がテヴェレ川<sup>11</sup>の河岸へと連れ戻され、アウグストゥス帝の王冠の上に（いかに滑稽で表面的な仕方ではあれ）置かれるのを目にした時、彼が何を感じただろうかなど、考えるのもおぞましい。

イタリア・ファシスト党の行進曲は、ご存知の読者もいるだろうが「ジョヴィネツァ (Giovinezza)」<sup>12</sup>である。そしてもちろんこの言葉はイタリア語では若さを意味する。ムッソリーニと同じく、さらにヒトラーと同じく、マリネッティも若者たちからなる暴力集団を運営していた。「若さ」が彼の口の端にのぼらないことはなかったが、とはいえ当時、彼自身はだいたい

大人になっていた。彼が大好きな所見の一つは、自分とその追従者が三五歳を超えてまで生きながらえるなどとは夢にも思わない、というものだった。そしてそのとおり彼らは異常な速さの航空機に乗って夕陽に向かって飛び立っていった。さもなければガタゴト音を立てる機械の傍らに彼らが立っている間に、より新しくずっと若いファシストが登場し、彼らを打ちのめした後で飛行機に飛び乗り、空へと駆け上がっていったようである。

奇妙なことにマリネッティの追従者たちはみな随分前に死んでしまった。これらロマンチックな考えを推奨した彼だけが未だ存命で、ときに活発でさえある。

カール・マルクスとヘーゲルという類比——ヘーゲルのようなただの哲学者からどのようにしてマルクスのようなただの経済学者が生まれ、そしてマルクスからどのようにしてロシア革命というあの強大な騒乱が生まれたのか——を思い出すなら、あるいはお好みであればもう少し時間を遡り、フランス革命に先立って「思想家たち」とルソーが果たした役割を考えてみるなら、我々の（一つの見出し語、すなわちファシズムのもとにまとめられる）現在の病理全体が一人の哲学者ぶったジャーナリスト兼パンフレット制作者に由来するというのも、さほど理解しづらくはあるまい。スペインの黒シャツ分隊とドイツのナチス突撃隊員——そして親衛隊——はみな、舞台上でマリネッティ師が真似してみせたアドリアノーブルでの銃声にまで、あるいは——マルス神よりはむしろ芸術の女神たちに則してものを考えていたとはいえ——その実力行使が常に個人的な戦闘行為へと転向するおそれのあった未来派のファランステール<sup>13</sup>にまで遡ることができるのだ。

### 第三章 アクションへのカルト信奉と権力へのカルト信奉

我々は今日、未来派の時代を生きている。1914年から1918年の戦争は確かに騒々しいものではあったが、およそ未来派の理想にまで達するものではなかった。その理想は講義室の舞台裏でグズグズしていたのである。1941年4月のもののようなロンドン大空襲は、思うに、合格水準に達し、理不尽な未来派の規範に適うものだったろう。

きっとお気づきのとおり、古代ギリシア人たちは芸術——要するに悲劇的な芸術——を下剤だと考えていた。悲劇的な芸術家の役割とは我々の精神に溜まった悲劇的な事柄の蓄積を全て排出させること [カタルシス] にあると彼らは信じていたのである。観劇に行けば、劇中の登場人物らを襲う不幸に咽び泣き、そしていわば隠れていた悲しみ、自責の念、憐憫といった重荷から解放されて劇場をあとにする。言い換えると、大きな不幸を経験せねばならないけれども、その後には「ふさぎの虫」もしくは慢性の「厭世感」を和らげてもらえる。俳優は巧みにそれを排出してくれるのだ。

以上が偉大な芸術、つまりシェイクスピアの戯曲のような悲劇的な芸術に関する古典的な説明である。バッハの途方もない音楽もまた、同じような仕方でああなたの個人的な生活における何事かの代理を務めているのだ。これは芸術の持つ機能の一つであり、人間的な事柄を委任されているという事実によって正当化されないような芸術など実質的に存在しない。

芸術は何か現実的なものの代わりに存在する。芸術はあなたが自ら行動せねばならないことを免除してくれる。それはあなたのために舞台上の役者のようにして演技=行動 (act) する。あなた自身で言い淀みながらでも言わねばならない事柄を免除してくれる。つまりあなたよりもずっと上手にそれを言ってくれる。あるいはあなたの目の前に高貴な典型を示し、その典型が——偉大な聖母像における神々しい母性のイメージというように——ひるがえって今度はあなた自身の経験に魅力的な光を添えてくれる。

今やアクション (action) を起こす人へのカルト信奉は、何にもまして「総ての人が自分自身を演じ (act) ている」状態として描写される事態を意味する。劇場の木板や板石の上で出演者たちがあなたに向けて演技するのを眺める代わりに、今やあなたが世界という舞台上でアクションをなすのである。

\* \* \* \* \*

これら美的な原理が民主主義とファシズムの何と関わってくるのかを示すのは難しいことではない。それらはとりわけファシズムと大いに関係しており、もしそうでなければここで語るべきではない。

ファシズム (その序曲は先に示したとおり未来派だった) とはアクションへの、それも (戦争、強姦、殺人、成層圏飛行などといった) 思い上がったアクションへのカルト信奉であり、それはどんなに活力のない人間にもウィリアム・ブレイクや『真夏の夜の夢』の作者のもののような夢を提供してくれる麻酔薬によるような仕方ではなく、その強められたテンポにおいてアクションを芸術と同列のものに仕立て上げる。

行動を起こすことができる、さらには行動に長じているというのは、この惑星で成功裡に生きることにとって例外なしに必須の前提であるが、アクションへのカルト信奉——アクションについて事情通ぶること——はまた別の事柄である。

ちょうどシュトゥーカ爆撃機乗りがやってみせるように、解体してしまうまでアクションを釣り上げてしまうことはさらに別の事柄である。そこには実際のところ新参者にいわゆる「死への願望」を注ぎ込むということが含まれている。ここでもまたニーチェの「危険に満ちた人



生」が芸術創造の諸条件のいくつかを請け負うものとして利用されるのである。

「ファシズムの父」に向けられた私の反発は党派的な偏見によるものではなかった。つまり私が芸術家だったから彼に異議を唱えたのではない。そのことは私のヒトラー氏に対する反発の理由を、彼の芸術に対する攻撃ゆえの私の憤激の感情に求めるべきでないと同様である<sup>14</sup>。

一人のとても聡明な若いイギリス人作家が、私のヒトラー氏への非難は（彼にはそう見えたのだらう）そうした理由から説明できると主張したことがある。しかしそうした説明は間違いである。もちろんモダンアートが関わっているからと偏屈者になってみても私がヒトラー氏を好きになることは決してない。ヒトラー的なものに対する私の実際の異議申し立ては（彼が我々[芸術家の]敵であるという私にとっては重要な事実は横に置くとしても）——他の全てのアクション教理に対する私の異議申し立てと同様に——それほど単純なものではない。

「ファシズムの父」に対する私の反発は芸術の次元というよりもむしろ生活の次元に由来するものであった。私は芸術家として以上に人間として彼の教えが持ち込まれることに反対したのである。その芸術理論の背後に私は確かにシュトゥーカ爆撃機を見た。事実、その邪悪な形状の輪郭を見逃すことの方が難しかったらう。その大音響と唸り声はマリネッティ師の発する全ての単語の内に暗示されていた。

当然のことながら私がシュトゥーカ爆撃機に反発したのは私が芸術家だからではないかという反論もあろう。実際、「人間」と「芸術家」という言葉は、その使われ方がときに示唆しているように厳密に切り分けられるものではない。それはともかくとして、もし未来派が成功すれば、地球上で芸術が占める立場はますます小さくなっていくだろうことを私は明晰に理解していたのであり、そうした明晰さは、一つ言わせてもらえば、当時としては非凡だったのである。文明化された芸術が生活へと後退する、あるいは押し戻されてしまうだろう、それらは生活と区別のつかないものとなるだろう——、そしてこのことは多かれ少なかれ今日でも起こっていることである。当時の私は次に何が続くのかを全て見通せていたわけではない。しかし私はかなりのことを理解していたのだ。

マリネッティが喚き散らした未来派的な未来では、文明化された芸術のための場所——何であれ何らかの仕方で厳密には実践的でないものための場所は存在しない。そうするとアクションの人、しかも最も事情通ぶったアクションの人が芸術家だということになる。顎にパンチを喰らわせるボクサーとマシンガンで弾丸を連射する兵士が、強化された自己表現の粗野な発作において我々に対して最もよく表現をなしたがゆえに芸術家だということになる。我々はよりいっそうのセンセーションを求めてやまない古代ローマやビザンチン帝国の一般大衆のよ



うに熱に浮かされて興奮した子どもにならねばならないのだ。

私はできる限りこのヒステリックなデカダンスに対して反抗し続けた。後には私の生活そのものと名声を危険に曝すことさえ承知の上で、この新たな最終決戦の脅威に対抗したのである。というのも1914年から1918年にかけてのサトゥルヌス祭〔第一次世界大戦〕を再び世界が繰り返すのに甘んじようとする者は誰であれ腹黒い悪役だったからだ。

いずれにせよ1913年の時点で私は「芸術なき世界」、ちょうど今や我々を取り巻いているような不毛な世界の片鱗を掴んでいた。そしてこのとき私はこのアクションのためのアクションという哲学に対抗して自らもアクションへと身を投じた。つまり、まるで我々の文明全体が破壊的なアクションへと到らねばならなかったかのようにシュトゥーカ爆撃機に対抗兵器をぶつけつつ馬鹿げた権力信仰の結末から我々を救おうとしたのである。

私は次々と記事を書いてこれを攻撃した。いかにしてこれら未来派の彫像が——両眼を動かし頬紅を塗られて——やがて映画スターへと花開くのかを指摘した。そんなものは「どんな彫像もグレタ・ガルボほど美しくはなれないのであれば、芸術とはいったい何の役に立つというのか」ということの別の現れに過ぎなかった。それは根本的には株式仲買人、ブックメーカー、自動車業界の大物の芸術哲学である。

「ひたすらアクションだけの世界」、私が「芸術なき人間」<sup>原註2</sup>と指摘したような者たちの世界は、今や徐々に明らかになりつつあるように、間違いなく恐ろしい場所であろう。そしてこの非芸術の福音が（実際そうだったように）イタリアのような「芸術的」な地から、画家、音楽家、詩人たちからなる完璧な陣容が支援する美的な十字軍のかたちをとって到来したがゆえに、少なくともその本当の趣旨を全く隠しきれはしなかったのは、今思い出してもありがたいことだった。

\* \* \* \* \*

さて、マリネッティの「未来派」によって生み出されたこれらの芸術に関わる諸問題についてこれ以上こだわること、あるいはこれ以上深く論じることはすまい。要点はつまり、この高度に芝居じみた滑稽でさえある高揚感の奔流は政治的な分野で反応を呼び起こしたということ、そしてその根底には何か不吉にも当時の時代精神と同調するものが存在していたということである。後のイタリア・ファシスト党の統帥も我々の何人かもそれを耳にしていた。

ここでマリネッティが「ファシズムの父」だとすれば、さらに彼自身にも起源がある。マリネッティに対して最も影響力を持っていた教師とは間違いなくフリードリヒ・ニーチェだった

——そしてムツソリーニは繰り返しニーチェに対する恩義を表明していた。ソレルの『暴力論』と、そしてもちろんマキャヴェリは重要な役割を果たした。しかし観念の領域においてファシズムの真の祖先と言えるのはニーチェであり、あるいはニーチェを経由してチャールズ・ダーウィンにまで遡れるのだ。

私の考えでは、(ムツソリーニによるオリジナルの商標のものであれ、ナチスや他の様々な変種であれ) ファシズムの扇動者を見つけ出したいのなら、まさにチャールズ・ダーウィンこそがその人物である。ダーウィンは哲学者ではなかった。彼は19世紀の「科学者」に過ぎなかった。彼が「生存競争」と「適者生存」の術語を定義し(このかくも機械的な秩序においては何が適しているのかをこの定義に即して強調しつつ)、そして「弱肉強食」の自然と呼ばれた機械仕掛けの怖い見取り図を広げて見せたとき、彼は自分がどんな類いの雪玉を転がし始めたのか微塵も理解していなかったことは疑いようもない。

ダーウィンは一般化に長けた研究者であり、ニーチェはダーウィニズムの哲学者であった。後者は(最終的に彼が何を言ったにせよ) ダーウィン流の解釈を受け入れ、自身がダーウィンから学んだものを自意識過剰で高度に独断的な形式へと落とし込んだのである。この偉大なドイツの詭弁家は現代のジャグルを体系化した——そしてそこには虎ではなく、急速に消えつつある野獣たち<sup>15</sup>に取って代わるべく人間によって作り出された遥かに恐ろしい機械が巢食っていたのである。彼は容赦のない戦闘、すなわち自己表現の理念的な形態としての、そしておまけに神秘的な究極の善としての、道徳的な戦闘という「物騒」な絵巻の特許権を持っている。というのもニーチェには逆さまになった道徳臭さがあって、その痕跡は道徳臭い底意が決して途切れることのないヒトラー氏のいたるところに見て取れるからである。

さて、マリネッティ師が大砲の上に飛び乗り、破廉恥な顎とギョロツとした目を開いて、黒シャツを来た追従者らに向けて何か血なまぐさい趣旨のことを叫ぶとき、究極的にはまさにチャールズ・ダーウィンこそが彼をして虎を真似たつもりの跳躍をさせているのである。そして彼が必要とする饒舌な言い訳と「危険に満ちた人生」といったスローガンで彼を武装させたのはニーチェである。ニーチェは常にファシズムの聖書であり続けるはずだ——ちょうどマルクスが共産主義の聖書であるように。

ニーチェはダーウィンの生存競争の唯物論を猿真似し、彼が言い張っていることには、これを権力闘争にすぐ替えた。とはいえ権力闘争は生存競争の単なる延長に過ぎない。権力という言葉が、劣った類いの人間特有の夜郎自大の本能による馬鹿げた奮闘という固有の話を物語るのだ。

今日、我々はドイツ人たちがかの地の新聞紙上で「支配民族」をめぐる問題について議論しているのを耳にする(ところで、持たざる者たちが次に支配力のある持てる者たちになった

なら、今の持てる者たちに対する持たざる者たちの高貴な闘争はどのようなものになるのだろうか)。

この支配者たちとは、もちろんのこと後の超人たちのことである。彼らこそ、鉤十字がヨーロッパで勝利を収めることになれば歴史的にはゾロアスターの隣に席を占めることとなるツァラトゥストラの作者の気難しい頭脳の所産なのである。

## 以降の章立て

### 第三部 シーパワーと普遍主義

#### 第一章 領土 vs 波

#### 第二章 シーパワーについての新しい考え方

#### 第三章 普遍主義と国家主義

#### 第四章 普遍主義的な見取り図における人種と階級

## 結論

## 原註

- 1 税制がイギリス本国の社会構造に何をもたらししているかを見てみると——さらに我々はこの戦争が終わるまでにはイングランドの富が目も眩むほど失われることによって不労所得階級の一掃が避けられないと教えられている——、私が言及する「大刷新」はいかなる社会変革もなしに実現されると想定してもよからう。それはただ起きてしまうのだ。この純粋に経済的な「恐慌」の後に我々の社会がどのようなものになるかは、これらの条件によって頭角をあらわす指導者たちの知性とイニシアチブにかかっている。
- 2 ウィンダム・ルイス氏の著書のタイトル。

## 訳註

- 1 フリッツ・クーンらによって1936年に結成された親ナチス・反ユダヤの右翼団体。
- 2 ウィリアム・ダドリー・ベリーによって公式には1933年に創設されたアメリカの親ナチス組織。
- 3 イギリス出身の政治評論家で、後にドイツに帰化した人種主義者。通俗科学的な著作を通して汎ゲルマン主義と反ユダヤ主義を支援した。
- 4 ベルリンの中心にあった通りで、当時の外務省の建物があったことからドイツの外交エリートを指す言葉として用いられた。
- 5 1920年代のファシスト・イタリアによるギリシア侵攻のことを指すか？

- 6 ロシア革命時に銃殺された最後のロシア皇帝ニコライ二世の第四皇女アナスタシアが実は処刑されなかったとして多くのアナスタシアを詐称する女性が現れたことを踏まえている。
  - 7 古代ローマにおいて不在資本家が奴隷を使って経営した広大な所有地のこと。
  - 8 1939年のハリウッド映画。あらすじは、ボーイスカウトのリーダーだった主人公のスミスが急逝した上院議員の代わりに政界に担ぎ出され、政治の腐敗とたたかうというもの。
  - 9 自前のサーカス列車を所有してアメリカ合衆国を巡業した著名なサーカス団。
  - 10 1914年6月12日にロンドンのドレ・ギャラリーでマリネッティがC・R・W・ネヴィンソンを交えて講演を行っていた会場にルイスらが押しかけた事件を指す。Cf. Wyndham Lewis, *Blasting and Bombardiering*, University of California Press, 1967; p.33.
  - 11 テヴェレ川はローマ市内を流れる河川。ローアの創始者であるロムルスとレムスはこの川に流されたという伝説がある。1930年代にムッソリーニはその水源に古代風の石柱を建造した。
  - 12 イタリア国家ファシスト党、政府ならびに軍の公式の賛歌。1924年から1943年にかけてイタリアの非公式な国歌であった。
  - 13 フランスの思想家シャルル・フーリエが唱えたユートピア社会において、新社会構築の基礎となる共同体住居のこと。ルイスが念頭に置いているのは、古代ギリシアの陣形「ファランクス」にさかのぼるこの言葉の語源であろう。
  - 14 ヒトラーがゲッベルスの着想により1937年7月から開催し始めた『退廃芸術展』のことを指す。
  - 15 上記の頽廃芸術展で野獣派(フォーヴィズム)に近いドイツ表現主義の芸術家たちの作品が展示され弾圧されたことを、機械を称揚するイタリアの未来派と対比させながら暗示していると思われる。
- ※ 前回の本稿の掲載後、この翻訳作業を含めたウィンダム・ルイスに関する研究は、日本学術振興会の科学研究費助成事業に基盤研究(C)「ウィンダム・ルイスのメディア論——アートとイデオロギーの交錯」(課題番号:19K00137)として採択された。